

金子みすゞ詩集より

不思議^{ふしぎ}

私は不思議でたまらない、
黒い雲から降る雨が、
銀にひかっていることが。

私は不思議でたまらない、
青い桑^{くわ}のはたべている、
蠶^{かいこ}が白くなることが。

私は不思議でたまらない、
たれもいじらぬ夕顔^{ゆうがな}が、
ひとりではらりと開くのが。

私は不思議でたまらない、
誰にきいても笑ってて、
あたりまえだ、ということが。

私と小鳥と鈴と

私が両手をひろげても、
お空はちつとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面^{じべた}を速くは走れない。

私がからだをゆすつても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがつて、みんないい。

大漁

朝やけ小やけだ
大漁だ
大ばいわしの
大漁だ。

浜はまつりの
ようだけど
海のなかでは
何万の
いわしのとむらい
するだろう。

木

お花が散って
實が熟れて、

その實が落ちて
葉が落ちて、

それから芽が出て
花が咲く。

そうして何べん
まはつたら、
この木は御用が
すむかしら。



お魚

海の魚はかわいそう。

お米は人につくられる、
牛は牧場で飼われてる、
鯉もお池で麩を貰う。

けれども海のお魚は
なんにも世話にならないし
いたずら一つしないのに
こうして私に食べられる。
ほんとに魚はかわいそう。



つくる

小鳥は
わらで
その巣をつくる。

そのわら
そのわら
たあれがつくる。

石屋は
石で
お墓をつくる。

その石
その石
たあれがつくる。

わたしは、
砂で
箱庭をつくる。

その砂
その砂
たあれがつくる。

蓮と鶏

泥のなかから
蓮がさく。

それをするのは
蓮じゃない。

卵のなかから
鶏が出る。

それをするのは
鶏じゃない。

それにわたしは
気がついた。

それもわたしの
せいじゃない。

梨の芯

梨の芯はすてるもの、だから
芯まで食べる子、けちゃんぽよ。

梨の芯はすてるもの、だけど
そこらへほうる子、ずるい子よ。

梨の芯はすてるもの、だから
芥箱ごみばこへ入れる子、お慥りこう巧よ。

そこらへすてた梨の芯、
蟻がやんやら、ひいてゆく。
「ずるい子ちゃん、ありがとよ」

芥箱ごみばこへ入れた梨の芯、
芥取爺ごみとりじいさん、取りに来て、
だまってごろごろひいてゆく。

こぶとり

正直爺さんこぶがなく、
なんだか寂しくなりました。
意地悪爺さんこぶがふえ、
毎日わいわい泣いてます。

正直爺さんお見舞いだ、
わたしのこぶがついたとは、
やれやれ、ほんとにお気の毒、
も一度、一しよにまいりましょ。

山から出て来た二人づれ、
正直爺さんこぶ一つ、
意地悪爺さんこぶ一つ、
二人でにこにこ笑ってた。

星とたんぽぽ

青いお空の底ふかく、
海の小石のそのように、
夜が来るまで沈んでる、
晝のお星は眼にみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

散ってすがれたたんぽぽの、
瓦のすきに、だアまって
春のくるまでかくれてる、
つよいその根は眼にみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

つもった雪

上の雪
さむかろな。
つめたい月がさしていて。

下の雪
重かるな。
何百人ものせていて。

中の雪
さみしかろな。
空も地面も見えないで。

こだまでしょうか

「遊ぼう」っていうと
「遊ぼう」っていう。

「馬鹿」っていうと
「馬鹿」っていう。

「もう遊ばない」っていうと
「遊ばない」っていう。

そうして、あとで
さみしくなつて、

「ごめんね」っていうと
「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、
いいえ、誰でも。



金子みすゞ詩集より

さびしいとき

わたしがさびしいときに、
よその人は知らないの。

わたしがさびしいときに、
お友だちは笑うの。

わたしがさびしいときに、
おかあさんはやさしいの。

わたしがさびしいときに、
仏さまはさびしいの。



ほうおんこう
報恩講

「お番」の晩は雪のころ、
雪はなくても暗のころ。

くらい夜みちをお寺へつけば、
とても大きな蠟燭と、

とても大きなお火鉢で、
明るい、明るい、あたたかい。

おとなはしつとりお話で、
子どもは騒いじゃ叱られる。

だけど、明るくにぎやかで、
友だちやみんなよっていて、
なにかしないじゃいられない。

更けてお家へかえっても、
なにかうれしい、ねられない。

「お番」の晩は夜なかでも、
からころ足駄の音がする。

花のたましい

散ったお花のたましいは、
み仏さまの花ぞのに、
ひとつのこらずうまれるの。

だって、お花はやさしくて、
おてんとさまがよぶときに、

ぱっとひらいて、ほほえんで、
ちようちよにあまいみつをやり、
人になにおいをみなくれて、

風がおいでとよぶときに、
やはりすなおについてゆき、

なきがらさへも、ままごとの
ごはんになつてくれるから。

お墓とむらいごっこ

お墓とむらいごっこ、

お墓とむらいごっこ、

堅けんちゃん、あんたはお旗はたもち、

まあちゃん、あんたはお坊さま、

わたしはきれいな花もって、

ほら、チンチンの、なあも、なあも。

そしてみんなで叱しかられた、

ずいぶん、ずいぶん、叱しかられた。

お墓とむらいごっこ、

お墓とむらいごっこ、

それでしまいになっちゃった。

お仏壇ぶつだん

お背戸せどでもいだ 橙だいだいも

町のみやげの花菓子も、

仏さまのをあげなけりや、

わたしたちにはとれないの、

だけど、やさしい仏さま、

じきにみんなにくださるの、

だからわたしはていねいに、

両手がさねていただくの。

うちにやお庭はないけれど、

お仏壇にはいつだって、

きれいな花がさいてるの。

それでうち中あかるいの。

そしてやさしい仏さま、

それもわたしにくださるの。

だけどこぼれた花びらを、

踏ふんだりしてはいけないの。

朝と晩とにおばあさま、

いつもお燈明あかりあげるのよ。

なかはすっかり黄金きんだから、

御殿ごてんのように、かがやくの。

朝と晩とに忘れずに、

わたしもお札をあげるのよ。

そしてそのとき思うのよ、

いちんち忘れていたことを。

忘れていても、仏さま、

いつもみていてくださるの。

だから。わたしはそういふの、

「ありがと、ありがと、仏さま。」

黄金の御殿のようだけど、

これは、ちいさな御門なの。

いつもわたしがいい子なら、

いつか通ってゆけるのよ。

こころ

おかあさまは

おとなで大きいけれど

おかあさまの

おこころはちいさい

だって、おかあさまはいいました、

ちいさいわたしでいっぱいだって。

わたしは子どもで

ちいさいけれど、

ちいさいわたしの

こころは大きい。

だって、大きいおかあさまで、

まだいっぱいにならないで、

いろんなことをおもうから。

